



Title	外来語の問題と英語教育
Author(s)	丸山, 孝男
Citation	明治大学教養論集, 113: 113-132
URL	http://hdl.handle.net/10291/12141
Rights	
Issue Date	1978-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

外来語の問題と英語教育

丸 山 孝 男

1. はじめに

一つの言語が他の言語から完全に独立して存在することはあり得ない。言語とは、多かれ少なかれ相互に影響し合うものである。

勿論、その影響の度合いは、国境が隣接していたりして、地理的条件によっても異なるし、国交の親密度によっても異なる。相手国の経済力、政治力、またそれぞれの国民性によっても異なる。かつて被植民地であった国は当然統制国の言語の影響を受けることになる。

それにしても、最近の日本語への外来語の流入には凄まじいものがある。その凄まじさを反映してか、外来語という言葉の代りに「カタカナ語」という言葉がすっかり定着している位である。

外来語という言葉を使う場合、当然、われわれの祖先が中国から借用してきた漢語と蘭語とよばれたオランダ語からの借用語をも含むのであるが、この論文では、外来語という言葉を特に直接英語から取り入れた言葉とヨーロッパ諸語から英語を経由して取り入れた言葉に限定する。

2. 最近の外来語の諸特徴

この話をすると、いつも一笑に付されるのであるが、私が3年半余りアメリ

かに滞在し、帰国して先ず驚いたことは、中学生や高校生、大学生がそろって“Madison Square Garden”と書いてあるカバンを持ち歩いていることであった。たまたま、私はある高等学校の帰校時間にぶつかり、学生達がそろって“Madison Square Garden”と書いてあるカバンを持ち歩いている光景を見たとき、直観的にこの学生達は団体旅行でニューヨークへ行き、Madison Square Garden から名前入りのカバンを記念品としてもらってきたものと思ったのである。ニューヨークの Madison Square Garden は東京の後樂園と同じように、スポーツばかりでなく、多彩な行事が行なわれ、特にニューヨークの人々にとってなじみの深いものである。急激な日本の経済成長、日本人の旅行熱、特に海外旅行者の急増を当時の *New York Times* や *Washington Post* がしばしば取り上げていたので、卒直な気持で日本も随分豊かになったものだったのである。

ところが、ある大学で学生に問い正したところ、日本の業者があのカバンを作って販売しているとのことであった。そして爆発的に売れているとのことであった。

このカバンの例だけにとどまらない。学生達はしばしばアメリカの大学名の入ったシャツを着たり、ブックケースを持ち歩いている。今更指摘するまでもなく、タバコの名もほとんどが英語名である。専売公社の話によれば、英語名にするとよく売れるのだそうである。

昨年結成された新自由クラブの名称が、「新自由党」ではなく「新自由クラブ」としたのは、その方が国民に対して開放的で柔軟な感じを抱かせるのだそうである。

ボクサーのリングネームにも英語名を使うようになってからすでに久しいし、最近続々と発刊されている雑誌名も欧米語の日本化である。例えば、『クロワッサン』、『ARURU』、『Gen』、『GALLANTMEN』、『ノラ』、『MORE』、『APACHE』、『OUT』、『COOL GUY』と名前を挙げようと思えばきりがない。

それと最近目だつのは、定冠詞を使い出したことと、英語をそのまま用いる

ようになったことである。「ザ・バザー」、「ザ・スーパーカー」、「ザ・チャンス」(電車の中の広告)、「ザ・チャイルド」(映画の題名)、『ザ・スパイ』、『ザ・ヤクザ』、『ザ・ギャングラー』(本の題名)、「ザ・バラエティ」(ラジオ番組)など。『週刊朝日』が、“ザ・新宿”とか“ザ・上高地”、散策ガイド、“ザ・美術館”というサブタイトルをつけて特集したし、『オール生活』(52年9月号)は“ザ・奮闘伝”「炎と汗と……」と題して特集した。

英語をそのまま用いる傾向にしても、広告文として“Discover Japan”、“Do-it-yourself”、“Creative your simple life”、“Never Give up”などが使われている。

政治家も好んで外来語を口にする。「シビルミニマム」、「アメニティ」、「環境アセスメント」、三木前首相の「クリーン」、「ライフサイクル」は余りにも有名であり、首相が退陣を余儀なくさせられたとき、『東京新聞』(51年12月17日付)は(片カナ政治ついにジ・エンド)という見出しで皮肉った。

このような外来語氾濫の実状を反映してか、『週刊朝日』(52年5月20日号)は「カタカナ英語氾濫時代」という記事を載せている。その中で、ある化粧品会社の宣伝文句である“for beautiful human life”にまつわる論争、即ちこの句が英語的表現なのか、それとも和製英語なのかを紹介したり、典型的な和製英語、「アーティクル・アベニュー」(輸入雑貨品売り場)、「キューティー・ショップ」(子ども用品売り場)、「クッキーフェイス」(小麦色の肌)、「サラダ・ドッグ」、「カツドッグ」などの例を挙げている。また、日本に存住している外国人の外来語に対する批判的意見をも載せている。

3. 外来語に対する批判

上記の諸々の例に見られるように、外来語の日本語への流入は、そのとどまるどころを知らない。従って、いわゆる最近の日本語の乱れの最大の原因が、過度な外来語の流入にあるとしてしばしば慨嘆的な発言がなされている。

例えば、『朝日新聞』(52年2月27日付)の「声」の欄で「美しい日本語を取り戻すには」というタイトルで、「……カタカナ化された英語が普及している

ようで、実は英語が最も通じにくいのが日本の都会だ。言葉としての英語をもっと普及させれば、日本語でも英語でもないカタカナ文字の困ったはんらんは下火になり、その弊害も少なくなろう。その時には、日本語の良さ、美しさも見直されよう。」という発言がなされているし、52年2月6日付の同新聞の「声」の欄で、「最近、政治家の発言をテレビや新聞で見るとき、意味のわからぬ外来語（アセスメントとかコンセンサス）など使われ、全体の内容が即座にわからないときが多い……」や52年7月付の「声」の欄では、「……外国語を正しく理解し、自分の意見を表現するためにも、自国語の表語を外来語に頼ることは、いましめるべきではないでしょうか……」と述べている。

新聞は、批判的意見ばかりを載せているのかも知れないが、外来語に対しては、日本語を乱しているという見地から批判的意見が圧倒的に多い。つい最近、評論家の浦松佐美太郎氏も「本来、日本語で十分に通じるはずなのに、最近、カタカナ英語がはんらんしすぎている。役所の文書にも、それが目立つ⁽¹⁾」と苦言を呈したそうである。

このような夥しい外来語の日本語への流入に対し、専門家の間でも意見が必ずしも統一されていないというよりも、外来語の流入を放っておいてもよい方と何んらかの規制を加えるべきだという方に真二つに分かれている。

例えば、柳文章氏は「私たちの、いわゆる外来語は、ある視点から見ると、一見氾濫しているようであるが、その氾濫の場はきわめて限られているのである。外来語は代名詞にさえなることはできない。……すなわちそれらは、明治以前から、日本文が漢字のことばを受け入れるためにあらかじめ備えてきたことばの座である。外来語と呼ばれるカタカナのことばは、そのあらかじめ備えられた場に漢字に代わって座を占めたにすぎないのである。」⁽²⁾と言い、外来語の問題を漢字に代わって日本語を豊富にしているという見地から捉えている。

金田一春彦氏は「外来語が多くなり、漢字が減ったことは、利害得失両方あって、どうとも言えない。ただし、日本語で言えるものを、好んで外来語で言う傾向は目にあまり、これだけは、日本人がもっと日本のものをほこりに思う

気持が強まる日を待つほかない⁽³⁾』と述べ、外来語の多用を必ずしも悲観的には捉えていない。

これに反し、外来語の研究者、久世善男氏は、「……各国とも、それぞれ自国語の浄化に頭を悩ましている。野放しにしているのは日本だけだ。そこで提案だが、各分野ごとに、しっかりした術語委員会をつくって、輸入外国語の選別をし、必要なものには適切な訳語をつくること、そして、その上に、アカデミー・フランセーズのような権威のある組織をつくり、日本語を守るために乗り出す必要があるのではないだろうか。しかも早急に。」⁽⁴⁾とかなり強い口調で、述べている。翻訳家の中村保男氏も「それほど外来語は私たちの心の中に入り込んでいて、私たちの現代感覚に訴える気分的要素を多分にもっている。が、そこに落とし穴があることを忘れてはならない。外来語を多用することは日本人の心⁽⁵⁾を失うことだ。」と主張して、安易な外来語の使用を戒めている。

確かに、太平洋戦時中の英語に対する規制を除けば、日本は外来語の流入に対して何んらの規制を加えてこなかった。規制を加えてこなかったというよりも、ジャーナリズムをはじめとして、学者、知識人、宣伝業界が好んで積極的に外来語を取り入れてきたと言える。世界の言語の中で、日本語ほど外国語を簡単にしかも数多く取り入れる言語は他にないであろう。

日本語の中になぜ多くの外来語が簡単に入りってくるのか。この問題を考察する前に、諸外国における外来語規制の問題に触れておこう。

4. 諸外国における外来語の規制

(1) フランスの場合⁽⁶⁾

フランスにおける外来語の規制に関し、1975年ドゴール派議員から提案があり、1975年法案が通過した。外来語を500語選び、テレビ、コマーシャル、広告、商品使用案内文、契約書、公共的、半公共的な文書の中に用いることを禁止した。この外来語の中には、hot dog, show business, living kitchen, weekend, parking 等の語が入っている。法律の実施は、1977年の1月からとされているが、違反のケースに対して罰則が適用されたかどうかは不明である。尚、こ

ういった法律による言葉の規制に対し、*Times*をはじめ、イギリス、アメリカの新聞は批判的である。その理由は、言葉は自然に発生し、形成されるもので、人為的に統制すべきではないということである。

(2) 韓国の場合⁽⁷⁾

現在の韓国の政治事情を考慮するならば、フランスにおける外来語の規制と韓国における外来語規制の問題を同系列には論じられないけれども、ともかく一昨年、韓国の内務省治安本部は、外国語の氾濫を締め出すため国語浄化運動を展開した。「街の広告、看板、放送用語に外国語が多すぎる。子供の菓子の名前の90%までが英語だというではないか」と朴大統領が国語浄化を閣議の席で指示したのは昨年の4月19日のことである。その内容を簡条書きにすれば次のようになっている。

- (1) 菓子や食品の新製品の名は韓国語に限る。
- (2) すでに出回っている外国名の製品も、できれば改めるよう奨励する。
- (3) 外国語の看板を一掃する。啓発期間を一ヶ月おくが、それを過ぎても従わない場合は、処罰で臨む。
- (4) 根本的な国語浄化のため文教部に専門学者による国語研究員を創設し、その実施部門としてマスコミ、教師らによる国語浄化運動推進委員会を構成する。

このような韓国の国語浄化運動に対し、特に菓子や食品のメーカーは、膨大な広告費をかけて消費者の耳になじませた商品名を簡単に変えるわけにはいかないと困惑しているのことである。

5. 外来語が増える理由

それでは一体どうしてこれほど多くの外来語が日本語の中に入ってくるのであろうか。外来語に対する規制が全くないからであろうか。外国に対する日本人の好奇心なのか。それとも、外国の文化を無批判に受け入れがちな日本人独特の性格を反映しているのであろうか。

矢崎源九郎氏の分類に従えば、外来語流入の理由は、大まかに次のように分けられている。(1)必要にせまられて、(2)外国崇拜のゆきすぎ、(3)デパートなどの宣伝にのって、(4)浮薄な心理⁽⁸⁾

外来語を取り入れる理由として、上言の理由はそれぞれ説得力をもつものであるが、これだけで外来語流入の理由のすべてを説明できないであろう。説明できないところが非常に重要な点を見逃しているように思われる。

近頃の外来語の殆どが、直接英語か又は英語を經由して入ってくるのであるが、一昔前の話ならいざ知らず、今更日本人がイギリスやアメリカに対してそれほどの好奇心を抱いているとは思われない。すべての面で外国を崇拜しているとも思えない。イギリスやアメリカに関しては、むしろ情報過多で、かえって飽き飽きしている面があるのではないだろうか。試みに学生達に「外国へ行くとすれば、先ずどこの国へ行きたいか」と質問すると、ギリシア、スペイン、スイス、中国などの名が出て、イギリスやアメリカへ行きたいと思っている者は以外と少ないのである。

これまで、外来語は文化の高い国から低い国に対して入ってくる、というのが定説であったが、今や日本の方がイギリスやアメリカより文化が低いと簡単に言いきることはできないであろう。ある面では日本の方がすぐれているのである。卑近な例になるが、テレビ、カメラ、自動車などその性能の良さでは、アメリカやヨーロッパを陵駕しているのは周知の事実である。徐々にではあるが、日本の伝統的文化を本格的に研究しようとする者が、諸外国で増えてきている。

外来語が日本語の中に多く入ってくることに對するこれまでの批判を検討してみると、その殆どが表面的な觀察の結果にすぎないように思われる。新聞の投書欄に載る批判的意見も大部分が感情論と言ってもいいほどのものである。

少し視点を変えてみるならば、日本語そのものの構造が、外来語を受け入れるのに便利にできているのである。いみじくも、イザヤ・ベンダサンが『日本人とユダヤ人』の中で指摘したように、日本語は誠にユニークな言語である。

縦にも横にも自由自在に書ける。⁽⁹⁾そして都合のいいことに、外来語はすべてカタカナを使って表記する。カタカナを使って表記するということは、いかなる外来語でも完全に日本語の音韻体系の中に組み入れてしまうということである。従って文字の面でも音声の面でも、外国語を使っているという意識がうすい。日本人の生活様式や思考様式に合わせて外来語を取り入れているのである。

一時、外来語をもっと英語らしく発音すべきであるということで「テキスト」を「テクスト」、「キリスト」を「クリスト」、形容詞の語尾「-チック」を「-ティック」にすべきだとの意見が出されたが、日本語の中で、外来語だけをその国の言葉に似せて発音するのも奇妙なものである。第一話しにくいし、聞く方も聞きにくいであろう。厳密に言うなら、日本語の発音と英語の発音は根本的に違っているのである。カタカナを使って英語らしく発音すること自体が不可能なことである。やや似ている場合はいいにしても、日本語の音韻体系の中に全くない英語の発音、例えば、/æ/, /θ/, /f/などがでてきた場合には、始めから不可能なことなのである。

外来語が簡単に日本語の中に入ってくる理由としてもう一つ言えることは、日本語はすべての外来語を不変化詞として受け入れて、「な」、「に」、「する」、「化」などを付け加えることによって無数の言葉を作り出すことができることである。このような言語は日本語の他にないであろう。

多少の例外はあるにしても、外来語をいくら受け入れても日本語の構文の本質は、何んら影響を受けていないということも、外来語を簡単に受け入れる理由として見逃がすことができないものである。もし、外来語の流入によって日本語そのものの構文が崩れていたなら、国民は、とっくに危機的意識を持ちはじめていたであろう。

勿論、柳文章氏の指摘にもあったように、カタカナ語が漢字に代わって日本語も豊富にしている面も見逃がすことはできない。それも外来語と日本の社会的背景を考慮するならば、致し方ない面がある。例えば、「マンション」である。これは、勿論、英語では apartment 又は flat のことであるが、日本語で

は、すでに apartment の短縮形である「アパート」という言葉がある。そしてこの「アパート」という言葉は、木造建築を意味し、狭く、安っぽく、暗いイメージが付きまとっている。それに引き換え「マンション」という言葉には、明かるく豪華さが漂っている。諸外国と比較すると、日本の住宅事情の極めて劣悪なことには定評がある。木造のアパートと比較したとき、鉄筋コンクリートのアパートを思わず「マンション」と呼びたかったのであろう。「マンション」という言葉を使わず、「鉄筋アパート」とか「鉄筋の集合住宅」と呼んだのでは、イメージがガタ落ちであろう。

それから、もう一つ例を挙げれば、「ミニスカート」の流行以来、「ミニ+日本語」又は「ミニ+英語」の形で無数に言葉ができてきていることである。外国へ2～3週間行って英語の勉強をしてくることを「ミニ留学」、新聞や雑誌のちょっとした記事を「ミニ解説」、「ミニ通信」、「ミニニュース」、その他、「ミニ事典」、「ミニ盆栽」、「ミニスクール」、「ミニ国会」など例を挙げればきりが無い。「ミニ」という言葉が状況にぴったり当てはまっているのである。

「ミニ開発」と言えば、土地を細分化して販売することを意味する。これを「ミニ開発」と言わず、「小開発」とか「小規模な開発」と言ったのでは、何かピンとこないし、長たらしく感じる面もある。小きざみに土地が売買されている状況と「ミニ開発」という言葉がぴったりと一致しているのである。

「日本語+ローン」という形で多くの言葉ができていく。「銀行ローン」、「住宅ローン」、「消費者ローン」、郵便局の「ゆうゆうローン」など、また、つい最近の新聞によると市中銀行が、高校や大学に進学する子を持つ親に対して「教育ローン」を行なうそうである。「ローン」とは言うまでもなく、貸付け金のことであり、借りる方してみれば借金のことである。これを「ローン」という言葉を使わずに、それぞれの立場で「貸付け金」、「借金」と解釈したのでは、心理的負担が重すぎる。外来語を使うことによって、もとの言葉の意味が薄れる。そのことを国民はあえて歓迎し、外来語が増加する理由にもなっているのである。

言葉はまさに生き物である。絶えず流動している。次々に新しく生まれる言

葉もあれば、消えていく言葉も無数にある。新しい流行と共にできた言葉は、流行が終わると同時にその言葉もまた死滅していく。

一時、盛んに流行した「ハッスル」や「ナウ」も今日ではほとんど聞かれなくなった。「ニューファミリー」という言葉も連日のように、ジャーナリズムを賑わした言葉であるが既にだんだん使われなくなってきている。

「ニューファミリー」というのは、もともと商品を売り出すため、業界がくりだした言葉なのであろう。52年9月16日付の『朝日新聞』には、「実は、お化けだった？ ニューファミリー」という記事が載っている。実体が伴わず言葉だけが先行してつくられた良き例である。

これまで外来語の問題は、もっぱら日本語との関連で取り扱われてきた。しかも外来語の氾濫が日本語を乱しているという観点からのみ取り扱われてきた。

しかし、これほど外来語が流入してくると、日本語との関連よりも英語との関連で外来語の問題を扱っていかなくてはならないように思われる。外来語の多用により、多くの学生は正式な英語と和製英語の区別がつかなくなってきている。多く使われる外来語に限って本来の発音や spelling の知識も乏しくなっている。

それで私は、次の項目を骨子として学生の外来語の知識の実態調査を行ってみた。

- (1) 和製英語を正式な英語に直すこと
- (2) よく使われる外来語の spelling の調査
- (3) カタカナで書いた国名を英語名に直すこと
- (4) 最近よく使われる外来語の意味の調査

6. 実態調査の結果

- (1) 和製英語を正式な英語に直すこと。調査対象者 (82名)

和製英語	正解者数	正解率 (%)
アイスコーヒー	13	15.9

アパート	68	82.9
アルバイト	17	20.7
イージーオーダー	1	1.2
ウーマンリブ	4	4.9
オートバイ	8	9.8
オールドミス	20	24.4
オフィスレディ	8	9.8
ガソリンスタンド	17	20.7
ガールハント	0	0
カンニング	7	8.5
キーポイント	0	0
ゲッツー	13	15.9
ゲームセット	42	51.2
コインロッカー	0	0
サインボール	27	32.9
シーズンオフ	14	17.1
ジーパン	29	35.4
スプリングコート	0	0
ダンプカー	9	10.9
デコレーションケーキ	0	0
テレビタレント	1	1.2
デパート	72	87.8
トーストパン	6	7.3
ナイター	64	78.0
バックミラー	1	1.2
ハンドル	4	4.9
フロントガラス	0	0
ペンフレンド	21	25.6

ボールペン	11	13.4
マイカー	0	0
ベビーカー	1	1.2
ホームドクター	2	2.4
ミシン	12	14.6

(2) よく使われる外来語の spelling の調査。調査対象者 (85名)

外来語	正解者数	正解率 (%)
アタシデント	81	95.3
アタセサリー	25	29.4
アッピール	47	55.3
アドバイス	72	84.7
アルバム	58	68.2
アンバランス	43	50.6
インタビュー	52	61.2
インフレーション	38	44.7
エゴイズム	64	75.3
エスカレーター	22	25.9
オリンピック	34	40.0
ガイダンス	44	51.8
カウンセラー	0	0
カタログ	43	50.6
カリキュラム	0	0
カレンダー	17	20.0
キッチン	50	58.8
ギャランティ	3	3.5
キャンセル	29	34.1
キリスト	36	42.3
クライマックス	17	20.0

クラシック	56	65.9
クリスマス	33	38.8
クリーニング	56	65.9
ゲリラ	0	0
コーヒー	82	96.5
コマーシャル	42	49.4
コミュニケーション	47	55.3
ゴール	70	82.4
コンサルタント	41	48.2
コンビネーション	24	28.2
サイエンス	71	83.5
サッカー	37	43.5
サマー	82	96.5
サンドイッチ	27	31.8
ジェネレーション	68	85.0
システム	80	94.1
シビリゼーション	40	47.0
ジャズ	60	70.6
シャワー	34	40.0
シリーズ	21	24.7
スキャンダル	47	55.3
ストライキ	57	67.1
スモッグ	65	76.5
ゼミナール	5	5.9
ソーセージ	1	1.2
タイトル	41	48.2
チャレンジ	24	28.2
チョコレート	40	47.0

デザイン	64	75.3
デリケート	50	58.8
ナイロン	21	24.7
ナンセンス	36	42.4
ハイジャック	3	3.5
パジャマ	8	9.4
バーゲン	14	16.5
パトロール	20	23.5
バラエティ	54	63.5
ハンカチーフ	35	41.2
ハンバーガー	2	2.4
パンフレット	8	9.4
ピリオド	41	48.2
ベテラン	13	15.3
マッサージ	14	16.5

(3) カタカナで書いた国名を英語名に直すこと。調査対象者 (82名)

国名	正解者数	正解率 (%)
アメリカ	73	89.0
カナダ	71	86.6
メキシコ	52	63.4
ブラジル	28	34.1
スウェーデン	15	18.3
イギリス	67	81.7
オランダ	37	45.1
ドイツ	32	39.0
オーストリア	20	24.4
ハンガリー	18	21.9
ポルトガル	3	3.6

ルーマニア	11	13.4
ブルガリア	3	3.6
ポーランド	19	23.2
チェコスロバキア	1	1.2
ギリシア	13	15.9
エジプト	30	36.6
ガーナ	0	0
トルコ	6	7.3
イスラエル	8	9.8
インド	40	48.8
パキスタン	10	12.2
タイ	2	2.4
ビルマ	0	0
インドネシア	4	4.8
フィリピン	2	2.4

(4) 次の外来語の意味を簡単に説明しなさい。調査対象者 (41名)

- (a) 環境アセスメント
- (b) ニューファミリー
- (c) ライフサイクル
- (d) エコノミック・アニマル
- (e) 住民パワー
- (f) ベッドタウン

先ず(1)について言えることは、正解率が50%を越えているのは、「アパート」、
「ゲームセット」、「デパート」、「ナイター」にすぎないということである。
「デパート」や「アパート」の正解率がかなり高いのは、これらの外来語が正
式な英語の一部分をそのまま用いているからであろう。「ナイター」も一時か
なり論議され、アメリカで night game に代わって和製英語が使われてきてい
るということも問題になり、学生達の記憶の中に残っているのであろうか。

逆に、「ガールハント」、「キーポイント」、「コインロッカー」、「デコレーションケーキ」、「フロントガラス」、「マイカー」などは正解率が0%である。典型的な和製英語であればあるほど、それに代わる正式な英語を覚えていないように思われる。しかし、「キーポイント」の正式な英語がわからなくても、日本語で「最も重要な点」と書けば、ほとんどの学生が the most important point と答えられるであろう。が、しかし、学生の和製英語に代わる正式な英語の知識がかなり乏しいことは否定し得ぬ事実である。

(2)のよく使われるカタカナ英語の spelling の調査については、当然のことながら、原語の発音とカタカナ表語の発音の違いが大きいものほど、spelling が不正確だということである。例えば、「カリキュラム」、「ゲリラ」の正解率は0%である。「カウンセラー」が0%なのは、ほとんどが、s と c と l と ll、er と -or の混同による。「ソーセージ」(1.2%)、「ゼミナール」(5.9%)、「ギャランティ」(3.5%)といずれもかなり低い。「コーヒー」や「システム」、「アドバイス」など日常よく使われている語の正解率がかなり高いとは言え、100%でなかったのは、やはりカタカナ英語が普及すればするほど、spelling があやしくなることのいい証拠であろう。

(3)の国の名前前の調査でも、正解率50%を越えているのは、アメリカ(89.7%)、カナダ(86.6%)、メキシコ(63.4%)、イギリス(81.7%)の四ヶ国にすぎない。ビルマ、ガーナーにいたっては、正解率0%である。チェコスロバキアのような spelling のむずかしい国名の場合には、やむを得ないにしても、インドのような最近ジャーナリズムで頻繁に取り上げられる国の名の正確な spelling を知っている者が50%に満たないというのは一考の余地であろう。インドについては、ローマ字式に Indo と書く者がかなりいた。トルコについても同様である。インドネシア、タイ、フィリピンなどアジアの近隣諸国の正解率が極端に低いのも日常の意識の問題とも関連がないとは言えない。国の名前を書くときに辞典を見れば事たるといふ訳にはいかない別の問題を含んでいるように思われる。国名に例をとっただけでも、カタカナがいかに日本人の生活の中に定着しているかがわかる。カタカナ語とは完全に日本語なのである。

最近よく使われる外来語の意味を正確に知っているかどうかについてテストしてみた結果は以下の通りである。

A：言葉の意味をよく理解している者

B：一部分理解している者

C：全く理解していない者

調査対象者数（41名）

	A	B	C
環境アセスメント	4	2	35
ニューファミリー	16	3	22
ライフサイクル	5	2	34
エコノミック・アニマル	21	9	11
住民パワー	27	5	9
ベッドタウン	24	11	6

先ず驚いたことは、公害問題がこれほど騒がれ、「環境アセスメント」についても連日のように新聞をはじめとするジャーナリズムで取り上げられているにもかかわらず、この言葉の正確な意味を知っていた者は41人中僅か4人であった。これはよく言われることであるが、近頃の学生は新聞も満足に読んでいないのかも知れない。実際には社会問題に関心をよせている学生はほんの一部で、ほとんどの学生は、実社会とは全く切り離されたところで、小さな殻をつくりその中で独自の生活圏を構築しているのかも知れない。

「ニューファミリー」については、前述したように、産業界が販売促進のために勝手につくりだした言葉であり、定義そのものがはっきりとしていないにもかかわらず、なんらかの形で、その意味を捉えているものは41人中16人もいた。

「ライフサイクル」については、三木内閣が誕生したときにキャッチフレーズとして盛んに使われた言葉であり、今では殆ど使われなくなったことから、正解者5人というのも無理のないことであろう。

「エコノミック・アニマル」については、日本人を批判する言葉として今な

お盛んに使われているため、かなりの学生がその意味を解していた。しかし、オーストラリアのユニークな日本観察者であるグレゴリー・クラーク⁽¹⁰⁾によればこの言葉が英語で用いられることは、きわめて稀れだそうである。使われたとしても、「ソーシャル・アニマル」、「ポリティカル・アニマル」と同じように中立的な概念として使われているにすぎないとのことである。どうやら、「エコノミック・アニマル」の軽蔑的意味は日本人が勝手に作りだし、それが欧米諸国に輸入され、それを再輸入して使っているらしい。

「住民パワー」については、「老人パワー」とか「ヤングパワー」、「婦人パワー」の形で盛んに用いられている言葉なので、27人もの学生がその意味を捉えていた。

「ベッドタウン」の正解率が50%越えているのもこの言葉が、今なお盛んに使われていることと関係があろう。

以上見てきたように、夥しい外来語の流入によって、英語との関連で様々な問題が生じてきている。今回の調査対象にはしなかったが、授業中感じることは、外来語として一般化している言葉ほどその発音が曖昧なことである。例えば、open という単語である。この単語の正式な発音は二重母音ではじまる [óupən] であるにもかかわらず、[ó:pən] と発音する学生がかなりいる。これは恐らく最近では「新規開店」に代わって「オープン」というカタカナ英語が多用されているからであろう。gas stove にしても全く同じである。今年、O. Henry の短編小説 *The Last Leaf* を速読用テキストとして使ったのであるが、その中に次のような文がでてくる。

“And then she called the Sue, who was stirring her chicken broth over the *gas stove*.”

大部分の学生は gas stove を完全に日本語の音韻体系に従って発音していた。/æ/ の音も /ou/ の音も /v/ の音も学生の口からは聞こえてこないのである。

7. 結 論

これまでの外来語の論議と言えば、その殆どが日本語との関連において行なわれてきた。特に、外来語が日本語を乱しているという点のみを強調した論が多かった。

また、これまで見てきたように外来語に対する批判的意見の大部分が外来語を受け入れやすい日本語の特性を無視した感情論にすぎないものであった。そして外来語の氾濫といわれるものが商業外来語と言ってもいいものばかりなのである。

一部の行きすぎに目を奪われて外来語が漢字に代わって着実に日本語を豊富にしている点を見失ってはならない。外来語を導入することによって日本語の表現力は豊かになっているのである。誰しも外来語の流入をとめることはできないし、とめる必要もない。

問題はむしろ英語との関連である。外来語を多く用いることによって学生の英語の発音、spelling の知識が乏しくなっている。和製英語と正式な英語との区別がつかなくなっている。意味の面でも外来語の影響を受けて英語本来の意味を誤解している面もある。従って、今後、外来語の問題を英語の時間に扱っていく必要があるだろう。

日本語の音韻体系に影響されがちな英語の発音については適宜指導していく必要があろう。和製英語に対する正式な英語を教えていく必要があろう。英語の時間に外来語を扱うことによって英語教育は母国語教育との接点になり得るのである。

注

- (1) 『朝日新聞』, 1977年9月9日
- (2) 柳文章『翻訳とはなにか』, 法政大学出版局, 1976年, pp. 46-47.
- (3) 金田一春彦『新日本語論』, 筑摩書房, 1973年, p. 217.
- (4) 久世善男『外来語雑学百科』, 新人物往来社, 1976年, p. 235.
- (5) 中村保男『翻訳の技術』, 中公新書, 1973年, p. 183.
- (6) 『朝日新聞』, 1976年1月9日

- (7) 同上, 1976年5月24日
- (8) 矢崎源九郎『日本の外来語』, 岩波新書, 1968年, pp. 17-22.
- (9) イザヤ・ヘンダサン『日本人とユダヤ人』, 山本書店, 1971年, p. 3.
- (10) グレゴリー・クラーク『日本人』, サイマル出版会, 1977年, p. 41.